

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



ヤン・ファン・ホイエン  
《レーネン、ライン河越しの眺め》  
一六四八年  
六六・〇×九六・五cm  
板・油彩

ホイエンは、十七世紀前半に活躍したネーデルラントの画家。この当時、彼の地の油絵は画面の奥から描き始め、段々手前へと筆を進めていくものだった。この絵であれば、空の平面から手を付け、水平線近くの町並み、中景の土手、手前の川面や土手、そして中景の建物や手前の人物等々、といった具合である。先に描いた部分を下地とし、さらに半透明の色を重ねることで、絵肌はより深みを持つ。透明にしたくない部分には厚く絵の具を重ね、不透明にする。ところが、画面右中景の帆船、向こう側の地平線が透けてしまっている。長い年月を経て、色が抜けてしまったのだ。画材に着目すると、画家の意図や思わぬ効果等が見えてくることがある。

(当館学芸員 新田建史)

No.  
123  
2016年度 | 秋 |

# ふじの国の新たな聖地にむけて

## ―創造力がスパークする空間―

静岡大学教育学部教授  
白井嘉尚

静岡県立美術館のロダン館とはいったい何でしょう。「静岡」と「ロダン」はどのように結びつくのでしょうか。それは「東西の風景画」を謳う美術館の、「人間像」も大切というメッセージなのでしょいか。西洋近代美術のシンボリックな役割を担っているようにも思えます。

しかしどれほどロダンが偉大でも、その芸術は私たちが生み出したものでも育んだものでも、その価値に最初に気づいて世に広めたものでもありません。西洋近代の偉大な芸術を、私たちが主体になり得ない時空のなかで仰ぎ見るだけなら、現代（日本／静岡）に生きる私たちとはいったい何者なのでしょう。

ロダン作品に、私たちに感動を与えるアクトチュアルな力があるのなら、そしてその感動が本当に大きなものなら、また私たちの内部にその感動を表す技や力が秘められているなら、そのような出会いは、新たな表現を呼び起こすことでしょう。

ロダン館が誕生して二十年が経過した今こそ、その可能性をさらに押し広げる

時かもしれません。パリのロダン美術館ではできないこと、東京の国立西洋美術館とも違う、後発の、地方の施設だからこそできることがあります。

明治の昔、萩原守衛がロダンに師事し、その造形を深く学ぶことで、西洋古典の規準から外れた日本人の身体・容貌の特徴を肯定し、優れた果実を生み出しました。このロダン館が、私たちの時代の芸術家がロダン作品と対峙し、本気になって表現の高みを目指す、ふじの国の新たな聖地となる。それは彫刻分野だけではなく、ロダン自身が、絵画、文学、舞踊、音楽など幅広い芸術ジャンルとの濃密な交流の中でインスピレーションを膨らませていったように、ロダン館が、ジャンルを超えた芸術が出会い交流する舞台になれば、どんなに素晴らしいことでしょう。この場から私たちの時代の表現が生まれ、そのことでロダン作品の新たな魅力に気づき、それを静岡の人が喜び誇りに思えるようになって初めて、ロダン館がこの地に真に根付くのではないのでしょうか。

平成二十五年度から三年間、静岡大学は文化庁の「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受け、その一環として、これまで二年間、静岡県立美術館と共催し、ロダンウィークにおける、ロダン作品にインスパイアされた舞踊公演とピアノ新曲コンサートを実施させていただき



「SCULPT OUR SOUL」2014、素我舞部 photo: 大野仁志

ました。また関連の美術展「めぐるリアート静岡」において、同館学芸員のキュレーションにより、県内出身の若手芸術家の作品とロダン作品との対話が鮮やかに提示されました。そのような流れを受け今年も、静岡県立美術館が主催し、静岡大学教員が企画・出演する、ロダンをテーマにした新曲コンサートが開催されます。また今年の「めぐるリアート静岡」は会期をロダンウィークと重ね、そこでも県内出身の彫刻家がロダン作品と対峙することに意欲を燃やしています。これから一連の試みが、ロダン館の新たな可能性を開く呼び水となれば幸いです。



「めぐるリアート静岡」2015、鈴木康広、《空気の人》 photo: 遠藤幸廣

# アーティストに出会い、語り、つくり、楽しむ

## ―夏休み子どもワークショップ―

主査 石津 宏直

夏休み子どもワークショップは一九八八年から恒例となつて続いてきた小学生向けのワークショップです。創作活動を通じた子どもとアーティストとの直接的なかわりを目標に、県立美術館や静岡県にゆかりの現役アーティストを講師として開催してきました。

今年の夏休みワークショップでは、平成二十七年に当館に作品が収蔵された若手の二名の現役作家を講師として招き、八月九日～十二日の四日間で二つのワークショップを開催しました。

八月九日・十日の前半二日間の講師は画家の大庭大介氏です。大庭氏の作品は、昨年度夏季の収蔵品展「白の表現力」や本年度の「新収蔵品展」で展示された当館所蔵の『LOG (Leafall)』やその他の作品も、キラキラとした輝く色面が特徴です。

今回のワークショップでは「キラキラえのぐでモダンアート」と題し、大庭氏が実際に作品制作に用いている偏光パールという特殊な絵の具を使って四〇×四〇cmのキャンバスに作品を描きました。

大庭氏が実際に作品制作に使用しているのと同じ配合で、絵の具をつくるころからスタートし、できた五色の絵の具を使ってマチエールづくり。絵の具の盛り上げ方、重ね方、微妙な混ざり具合、自分なりの表現を工夫しながら、作品の素材となる様々な模様や形を産み出しました。(写真①)そして、固まった絵の具でできた模様を組み合わせての作品作り。五色の偏光パールは、一見単なる白い絵の具にしか見えませんが、吸収力の早い子どもたちは、微妙な色の違いをしっかりと味わいながら、自分なりの風景を描いたり、高学年の子になると色



写真①

や模様の関連性自体を楽しんだり、二日間子どもたちがしっかりとモダンアーティストへと変容していきました。八月十一日・十二日の後半は、銅版画家の重野克明氏をお迎えし、「銅版画をおこられたこと ほめられたこと」を開催しました。こちらのワークショップでも、重野氏の版画のメインの技法であるエッチングを使って、作品の構想から作り、刷りまでを体験していきます。

重野氏が制作した銅版画や刷った作品も多数お持ちいただき、版画の魅力や作品に描かれている内容を語ってもらいました。その後の下絵づくりでは、明暗の表現や細部への描き込みなどを、参加者一人一人に声をかけ、より良い作品となるように熱心な指導が行われました。エッチングは、銅板を薬品で腐食させて版を作る版画の中でも手のかかる技法ですが、重野氏の丁寧な指導で、小学生の参加者たちが、日々の「おこられたこと」「ほめられたこと」をテーマにした絵日記のような味わいある銅版画を完成させることができました。(写真②)



写真②

## 再発見！ニッポンの立体 —生人形からフィギュアまで—

平成28年11月15日(火)～平成29年1月9日(月祝)

ることができます。

しかしこれまで美術館において紹介されてきたのは、芸術表現としての「彫刻」あるいは伝統美の発露としての「工芸」が中心でした。それ以外の立体物が紹介される機会はそれほど多くなかったと言えます。

そこでこの展覧会は、彫刻や工芸といった従来のジャンル分けにとらわれないことなく、古代から現代に至る多彩な日本の立体造形を広く紹介することに挑戦しました。むしろ、展覧会で紹介できるのはわが国で連綿と作られてきた立体物のうちのほんの一握りです。しかしそれでも、彫刻と工芸という二つの分野の間を、本物そっくりのものを作ることの意味、平面と立体の境界に位置するレリーフという存在、現代作家による立体表現の諸相、といったさまざまな問いが浮かび上がってくることでしょう。

まず、展覧会のプロログでは前近代の立体表現の諸作例を紹介し、古来の土偶や埴輪、近世の仏像や神像、人形、仮面といった造形物

です。これに続き、「西洋との出会い」と題した章では、西洋文明の流入に直面した明治以降の作り手たちが日本と西洋とのほごまでどのような試みを行ってきたかを、主として人物をモチーフとした表現に焦点を絞って検証します。

対象を本物そっくりに表現したいという欲望は誰もが抱くものです。とりわけ日本では緻密な技術を駆使して実物さながらに表現された立体物が多数制作されてきました。「似せることへの指向」の章に登場する作品に触れると、なぜ私たちはそうした作品に引きつけられるのか改めて考えさせられます。また、「様式化の諸相」では、そういった逼真表現とはまさに対照的なキャラクター化、様式化の産物ともいえる民俗造形やキャラクター像を紹介し、



松崎福松《野見宿禰と当麻蹶速》双葉寿司蔵



上方派《眠り猫とあわび》(根付) 京都 清宗根付館蔵

「立体と平面の境界」ではレリーフ(浮彫)を紹介し、レリーフは絵画と彫刻との境界に位置するもの、すなわち二次元と三次元の間に位置する不思議な存在です。本章では様々な浮彫の作例を通じて立体表現の特質を検討します。

私たち日本人は古くから小さなものを愛でる感覚を強く持っています。繊細な造形表現が加えられた小型の立体物は今も変わらず人々に愛玩されています。「愛らしき小立体」の章では、根付や香合といった小さな立体に寄せる私たちの感性を紹介し、

また、今まで挙げてきたものを含め、「飾る」ことは日本における立体作品の重要な用途の一つです。建築、服飾、床の間等々、様々な場を立体物は飾ってきました。「飾る立体」では、日本における立体造形と飾りとの関わりを振り返ります。

( 上席学芸員 村上敬 )

わが国では古代から現代に至るまでさまざまな種類の立体物が作られてきました。

すこし振り返ってみるだけでも、土偶や埴輪といった先史時代の造形、仏像・神像に代表される宗教的造形、各地の民俗造形(郷土人形など)、彫刻や工芸のような装飾的・芸術的造形、店頭キャラクター人形やマネキンのように産業に関わる造形、さらにはフィギュアやぬいぐるみに至るまで多種多様なものを挙げ

# めぐりアート静岡

記憶をめぐる 記憶をつくる

平成28年11月1日(火)～11月20日(日)  
\*一部会場別会期

13日(日)

Nehoi(田中義久・飯田竜太)

アート&スポーツ／ヒロバ「会期：10月

30日(日)～11月20日(日)」

岩野勝人 千葉広一 日詰明男

主催：静岡大学、静

岡県立美術館、静

岡市美術館、静

岡市(公財)静岡

市文化振興財団  
<http://megurinet/>



福井利佐

## 関連イベント

○アーティストトーク 11月13日(日)

13時30分～14時20分 鈴木基真

14時30分～15時20分 福井利佐

○ワークショップ「粘土で風景を作ろう！」

「めぐりアート

静岡」 出演作家で、

風景をモチーフにし

た木の彫刻を制作す

る鈴木基真さんを講

師にお招きして、た

くさんの粘土を使い

樹木や建物の立体造形を作ります。

日程 11月12日(土)

時間 13時～16時30分

会場 静岡県立美術館 実技室

対象 小学生以上、大人まで

定員 20名

問合せ、参加申込

TEL 054123719540

静岡大学教育学部美術教育講座(漆畑

月く木 10時～16時

「めぐりアート静岡」は、静岡市内のさまざまな場所を会場に、今を生きるアートを紹介する展覧会です。静岡大学を中心に三年前から始まりました。今年も、静岡県立美術館や静岡市美術館に加え、新たに「JR東静岡駅北口の「アート&スポーツ／ヒロバ」、そして旧マッケンジー住宅と中勘助文学記念館を会場に、六人と一組の作家が作品を展示します。

## 会場と出展作家

静岡県立美術館 鈴木基真 福井利佐

中勘助文学記念館・杓子庵 木下琢朗

旧マッケンジー住宅 千葉広一 木下琢朗

静岡市美術館「会期：10月25日(火)～11月

# ロダンウィーク

～ロダンを楽しむ特別な一週間～

平成28年11月1日(火)～6日(日)

ロダン館開館二〇周年を記念して、一昨年からはじめたロダンウィークも今回で三回目を迎えます。ロダンにちなんだイベントを楽しみながら、ロダンやその作品の魅力を再発見してください。ロダンウィークのイベントをちよっとだけ紹介します。

ロダン館では二つのコンサート「ロダンを聴く！」と「ロダン賞コンサート」が華やかに開かれます。「ロダンを聴く！」では、幅広い演奏活動を展開されている静岡大学の先生と学生によるロダンにまつわるピアノ作品の演奏と朗読が楽しめます。「ロダン賞コンサート」はロダン館の秋の恒例といっても良い、静岡音楽館AOIの「静岡の名手たち」オーディションの合格者の中から選ばれた「ロダン賞」受賞者によるピアノとヴァ

イオリンの調べで特別なひとときをお過ごしください。

美術館前の広場やプロムナードでは「ロダンマルシェ」と「にがおえひろば&アートプラット」が賑やかに開催されます。「ロダンマルシェ」はロダンの生まれ故郷フランス・パリをイメージし、草雜マルシェ実行委員会の皆さんがoshやれにプロデュースします。これまで以上に充実したグルメ・雑貨市とパフォーマンスが期待できそうです。美術館友の会の皆さんによる「にがおえ」は、ご家族連れに大好評です。県内アーティストの作品展示販売やワークショップなどもあり、盛りだくさんの内容が楽しめます。

このほか、静岡大学の学生たちによる「ギャラリートーク」や美術館ボランティアの皆さんによる「呈茶サービス」でお客様をお迎えします。ロダンにちなんだ秋の特別な一週間「ロダンウィーク」を是非お楽しみください。

(総務課管理班長 青木彰彦)



※ロダンウィークのイベント・スケジュールはP8をご覧ください。

## 渡辺省亭《十二ヶ月花鳥図》の構図について

首席学芸員 石上充代

渡辺省亭（一八五二―一九一八）は、幕末の江戸に生まれ、大正前半までを生きた画家である。菊池容斎に絵を学んだのち、海外輸出用の工芸品を作る日本最初の貿易会社「起立工商会社」で図案作成の仕事に携わり、明治十一年（一八七八）、パリ万博を機に会社の嘱託職員として渡欧。帰国後も工芸の仕事に関わるほか、内外の博覧会に出品、受賞を重ねるが、明治二十六年（一八九三）のシカゴ万博の後は公の展覧会には出品せず、画壇から距離を置いて独自の制作を続けた。洋風の写実的描写に基づく色鮮やかな花鳥画を得意とし、在世当時決して評価が低かったわけではないが、今日その名を知る人は多くないだろう（註1）。

本稿で紹介する《十二ヶ月花鳥図》は、省亭による濃彩花鳥画の十二幅対である（絹本着色、各一三九・九×五五・四cm、個人蔵）。二〇一四年に当館で開催された『アニマルワールド』展に全点が並べられ、その麗らかな姿は展示室でも異彩を放っていたが、この折の図録が唯一の画像掲載歴であり、それまでほとんど紹介されることのなかった作品である。写実表現が高いレベルで結実していると共に、洒脱で洗練された構図を見せることも、本作の重要な特徴である。ここでは、特に斜めの構図を取る図に着目し、その手法と効果について考えたい。

斜め構図のつくり方―四月、六月、三月、まず四月幅（牡丹に雀）（図1）を見てみよう。中央には紅牡丹の蕾と満開の花、そ

の後ろに散り際の紫牡丹、さらに後ろには半ば以上花弁を落とした白牡丹を描く。大ぶりな花びらが重なる様を綿密なグラデーシオンで表し、細やかに陰影を施した枝の描写や、三株を前後に並べる配置の効果もあって、ボリュームが強調され、牡丹ならではの豪華な趣を示す。一方で、牡丹の株の根元は墨をほかしてかき消すように表され、地面との関係は明示されない。牡丹そのものの立体的表現には注力しているものの、画面内の空間の厚みや奥行き感の表現は抑えられているといえる。

このごく浅い画面内空間の中であって、牡丹のひと群れは、画面左右で断ち切られながら、上下を余白とした中央部分に大きく配置される。モチーフが右上がりの斜めのラインを作ること、そしてそれが画面両端でトリミングされて

いることを意識するならば、描かれた図の部分には、画面外まで広がる斜めの長方形の区画を想定できるだろう（イメージ図参照）。描かれるのは、長方形の中に置かれた牡丹のうち、画面の枠で切り取られた一部分に相当する。

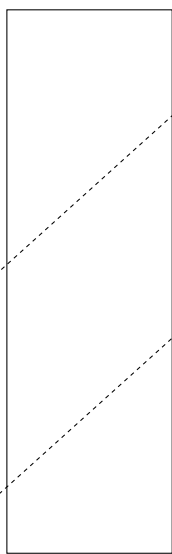
主要モチーフを画面中央に置くことで一層目を引くものとするとともに、ここを軸とし

て斜めの区画で画面を切り取ることで、例えば単純に水平に切り取るよりも画面に広がりを生み、同時に、多くの図を画面に取り込むことができるようになっていく。主要モチーフの強調と、限られた縦長画面の面積を最大限に活用する構図。省亭にとって、卓越した写実的描写力は絵描きとしての武器だったが、これらはその魅力をより効果的にアピールするための手法だったのではないだろうか。

十二幅中、斜めの構図を取り入れた作品は十図にのぼるが、いずれも同様の手法がとられる。六月（紫陽花に燕）（図2）はその分かりやすい例で、中央に置かれた右下がりの長方形の中に紫陽花が描かれる。色と墨を併用して表された紫陽花は、湿潤な空気とともに豊かな情感を示す。



図1 四月（牡丹に雀）



イメージ図

三月の〈桜下雉子〉(図3)では、雉子の雌雄が画面下方に描かれてその上空は空いており、一見中央に主要モチーフを置く例からは外れるものと思われる。しかし、ここに枝を伸ばす山桜の一枝に気が付くと、本図の主要モチーフはこの山桜であることが理解されてくる。中央の斜めに開けた空間は、繊細精緻に描かれた山桜を効果的に見せるための舞台ということになる。この舞台は、画面中央に右上がりの斜めの長方形を作るが、モチーフで埋められた区画ではなく、モチーフを際立たせるための「空白の区画」である点が四月幅・六月幅とは異なる。枝を伸ばす山桜は、この空間に確かな存在感をもって表されている。

### 構図の原点―工芸図案

《十二ヶ月花鳥図》では、モチーフの配置やトリミングの仕方、余白の作り方などにこのような工夫があり、結果として、明快で洗練された構図のなかにリアルな花と鳥が存分に描かれる、独自の花鳥画が出来上がった。省亭の優れた構図感覚は、写実表現と並ぶその特質として、しばしば指摘されるものである。ではその構図感覚は、何に由来するも

のだろうか。想起されるのは、輸出用工芸品の図案作成に携わっていたという経歴である(註2)。省亭は、明治八年(一八七五)、二十四歳のころから、工芸図案の仕事に関わっていた。その図柄は、日本的なモチーフとして海外で需要のあった色鮮やかな花鳥が中心で、この仕事を通して、装飾性豊かな花鳥画の技を磨いたのである。定められた器物の枠の中にモチーフをどう配置するか、または図をどのように枠内に切り取るか、という際の工夫やセンスは、図案作成の要だろう。省亭その人が手がけたと分かる図案は知られないが、二十代半ばのこの仕事を通して、省亭は、枠と図の関係について様々に研究し、デザイナーの腕を磨いたに違いない(註3)。図案作成を通して身に付けた高い意匠性が絵画制作にも生かされたのであり、省亭作品を特徴づける構図

の妙についても、こうした経験に負うところが大きいと考えられる。この時代の画家ならではの、工芸品を通した西洋との接触と意匠性の洗練。日本画家としての省亭の独創的な仕事が成立するにあたって、これらは不可欠の要素であった。

《十二ヶ月花鳥図》の中でも斜めの構図を取る作品に注目し、具体的な構図取りの手法とその効果について考えた。作品研究としてはわずかな一歩であるが、こののち研究が深められるべき画家の優品として、今後も本作の調査と理解を深めていきたい。

### 注

(1) 省亭の経歴と画業については、主に以下を参照した。

佐藤道信「渡辺省亭はなぜ欧米で好まれたか」(平山郁夫・小林忠編著『秘蔵日本美術大観 十クラクフ国立美術館』、講談社、一九九三年、所収)

高階秀爾監修『絵画の明治―近代国家とイマジネーション』(毎日新聞社、一九九六年)

野地耕一郎「渡辺省亭筆 びわに小禽」(『國華』第一三七〇号、二〇一二年)

(2) 省亭の作品の構図と工芸図案の意匠性との関わりについては、佐藤道信氏がすでに指摘している。註1佐藤 二二八頁

(3) 起立工商会社の図案集には、線描きされた器物の枠外へも図様を続けて描き、結果的に大きな図の一部が器物の枠によって切り取られたかのように見える図もある。画面外へ広がる区画という点で、ここで述べた省亭の構図取りを想起させ興味深い。



図3 三月(桜下雉子)



図2 六月(紫陽花に燕)



### 本の窓

ドナ・タート著  
岡真知子訳  
『ゴールドフィンチ』1-4  
河出書房新社 二〇一六年

ニューヨークの美術館で爆破事件に巻き込まれた少年テオは、誰よりも愛していた母親を亡くし、朦朧とした意識の中、偶然にも母の最大のお気に入りだった絵画を持ち出してしまふ……。その作品は、カレル・ファブリティウス作《ゴールドフィンチ(ごしきひわ)》(マウリッツハイス美術館蔵)。レンブラントの才能豊かな弟子の一人で、若くしてデルフトの火薬爆発事故で命を落としたことから、現存作品の少なさでも知られています。主人公、画家、そして名画の中の鎖につながれた小鳥。これらが合わせ鏡になり、ジェットコースターのように展開するこの長編小説は、非常に饒舌な文章にとまどうものの、真に偉大な芸術作品とは何なのかを問いかける一編です。

(当館上席学芸員 南美幸)

# 県美で音楽を

(公財)静岡市文化振興財団 静岡音楽館A O I 学芸員 小林 旬

静岡県立美術館でときおりコンサートを聴くことができるが、これまで、そのうちのいくつかは静岡音楽館A O Iが関わってきた。初めて行ったのは二〇〇一年、国際的に活躍するピアニスト高橋アキと狂言師の野村万禄のナレーションで『ピーターとおおかみ』。次に静岡児童合唱団のコンサート。ロダン館の段々畑のようなフロアの構造を活かして合唱をいろいろな配置し、動きながら、声が立体的に響くようにして、ロダン館でなければ聴くことのできない音楽の空間をつくることができた。

しかし、あのロダン館の鉄骨とガラスとインド砂岩でできたアーモンド状の内壁は、ちょっとやっかいな反響をつくってしまうので、けっして音楽に適した場ではない。それでも「地獄の門」をはじめとするロダンの彫刻群の圧倒的な存在感のなかで音楽を聴くことができるのは感動的なこと。二〇〇七年、諸田大輔がJ・S・バッハの無伴奏チェロ組曲をフルートで独り演奏したとき、それを強く感じた。

彼は「静岡の名手たち」というA O Iが開館から二十年以上続けているオーディションの合格者だが、二〇〇九年から「静岡の名手たち」にロダン賞を設け、受賞者



岩瀬健人(ピアノ) 第15、17回「静岡の名手たち」オーディション合格者、2013年11月3日

はロダン館でコンサートをする。これは静岡の演奏家たちにとって魅力的なことでも、近年そのコンサートは県美の秋を彩るロダンウィークのイベントのひとつでもあり、その頃、静岡じゅうで展開される静岡・室内楽フェスティバルにもラインナップされている。

美術館にとって音楽はかならずしも必要なものではないかもしれないけれど、美術館が音楽も提供していくのは有意義なことだ。ウィーン世紀末やパリのベル・エポックだけでなく、美術と音楽が結びついたときに初めて生まれる感覚、それを味わう機会はその多くはない。県美とA O Iがこんなふうにして、いや、それだけでなく、静岡のいろいろな文化の拠点が手を携えることで、新鮮で、より魅力的な静岡の文化をつくることができると思っている。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.Cから約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.Cから約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737  
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス  
毎週日曜日および祝日10:30～15:30  
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館  
Shizuoka Prefectural Museum of Art

30th ANNIVERSARY

つながる、次へ

## 「ロダンウィーク」～ロダンを楽しむ特別な一週間～ イベント・スケジュール

### ギャラリートーク

11月3日(木・祝)13:30～14:30 ロダン館  
静岡大学の学生によるロダン作品の解説  
※ロダン館観覧料必要

### 草薙ツアーグループ「呈茶サービス」

11月3日(木・祝)11:00～14:00 本館正面玄関前  
美術館ボランティアによる美術館の茶畑でとれたおいしい茶のサービス

### ロダンを聴く！～ピアノと朗読とともに～

11月5日(土)14:00開演 ロダン館  
静岡大学の先生と学生によるピアノコンサート+朗読  
※ロダン館観覧料必要

### 丘の上のロダンマルシェ

11月6日(日)10:00～16:00 美術館前広場・フロムナード  
※荒天中止  
草薙マルシェ実行委員会がプロデュースするおしゃれなグルメ・雑貨市&アートパフォーマンス

### にがおいひろば&アートプラット

11月6日(日)10:00～16:00 美術館前広場・フロムナード  
美術館友の会が企画・運営する似顔絵描き、若手アーティストの作品展示販売  
※小雨決行

### 「静岡の名手たち」ロダン賞コンサート

11月6日(日)14:30開演 ロダン館  
A O I ロダン賞受賞者によるピアノ、ヴァイオリンの演奏  
※ロダン館観覧料必要

※いずれも申し込み不要です。

### <お知らせ>

ロダンウィーク初日(11月1日)からスマートフォンにダウンロードして使える「ロダン館作品ガイドアプリケーション」の提供を開始します。あわせて館内でのフリーWi-Fiサービスも利用できます。

## 友の会のご案内

入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。